

指導活用技術
分類名〔病害虫〕

指9	催芽後保管した籾は、ばか苗発生リスクが高くなる
----	-------------------------

宮城県古川農業試験場

要約

催芽後保管した水稻の籾を播種した場合、保管日数が長くなるほどばか苗の発生が多くなる。

普及対象：水稻を栽培する生産者（68,000ha程度）
普及想定地域：県内全域

1 取り上げた理由

化学農薬の種子消毒効果は高いが、催芽終了後、数日間保管した水稻種子を播種した場合、化学農薬で種子消毒したにも関わらずばか苗が発生した事例があったため、催芽後の保管期間がばか苗発生に影響しているか試験したところ、保管日数が長くなるほどばか苗の発生が多くなることを確認したので指導活用技術とする。

2 指導活用技術

水稻栽培において、催芽終了後に種子を一定期間保管後播種した場合、化学農薬、温湯浸漬処理したものでばか苗の発生が多くなる。保管期間が長いほどばか苗の発生が多くなり、この場合、脱水後に保管したものより、水漬け状態で保管したものの方がばか苗の発生が多くなる。（図1、2）

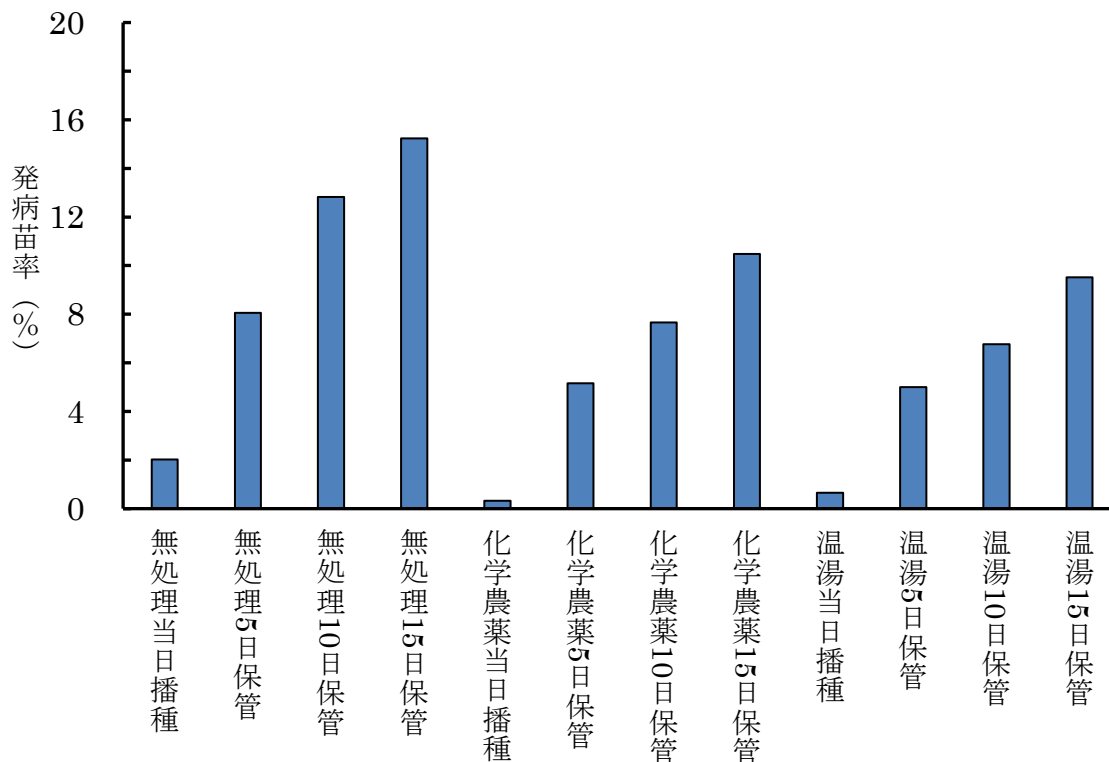


図1 水漬保管した場合の処理別、保管日数別ばか苗病発病苗率（令和3年）

3 利活用の留意点

- (1) 令和2年にばか苗病に自然感染した「ひとめぼれ」種子を使用した。無処理，温湯浸漬処理（60℃10分処理）および化学農薬処理（イプロナゾール・銅水和剤，商品名：テクリードC，200倍24時間処理）後に浸種（10℃10日間）した。催芽（29℃24h）後，当日播種したもの以外は5℃の恒温庫内で，5日間，10日間，15日間保管（水漬籾，脱水籾）後に播種した。
- (2) 播種は育苗箱1/10サイズの弁当箱に催芽籾19g（乾籾16g）で行い，育苗器を用い29℃で3日間出芽後は室温で管理した。
- (3) 各処理区は2反復で実施し，約2週間育苗後にばか苗病発病苗率を調査した。
- (4) ばか苗病が中発生の条件下で行われた試験である。

（問い合わせ先：宮城県古川農業試験場作物環境部 電話 0229-26-5107）

4 背景となった主要な試験研究の概要

- (1) 試験研究課題名及び研究期間
イネばか苗病の発生抑制技術体系の構築（令和3年，単年）
- (2) 参考データ

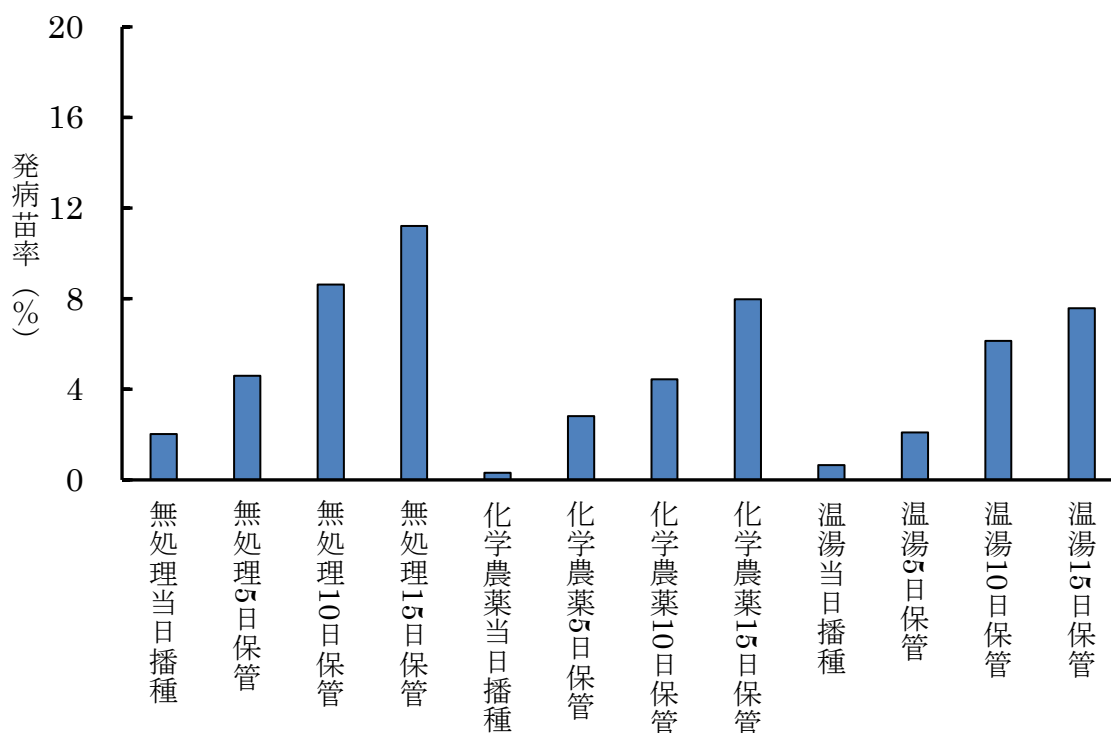


図2 脱水後保管した場合の処理別，保管日数別ばか苗病発病苗率（令和3年）

- (3) 発表論文等
 - イ 関連する普及に移す技術
温湯浸漬処理した種子のイネばか苗病菌に感染するリスクの評価（第91号参考資料）
 - ロ その他
なし
- (4) 共同研究機関
なし